

福澤研究センター通信

News letter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第3号 2005年9月30日 発行

目次

*まだ続いた中津の「福沢諭吉展」 河北展生 …… 2	*主な新収資料…………… 8
*福沢研究センターにおける知の連関	*主な動き…………… 10
「講演会／セミナー」 岩谷十郎 …… 3	*福沢関係資料の展示について…………… 11
*講演会・セミナー概要…………… 4	*諸記録…………… 12



包紙

右：Vol. I 縦215mm × 横145mm × 厚45mm
左：Vol. II 縦215mm × 横145mm × 厚40mm

* ロンドンで購入した英清辞書 *

文久2（1862）年開港開市延期交渉のため幕府が派遣した使節に従いヨーロッパを訪れた際、ロンドンで購入した English-Chinese dictionary。福沢諭吉自筆の包紙には「英清辞書 二冊 千八百六十二年 竜動にて買ふ価五ポント 火災余甚だ高価なりき」と書かれている。福沢のいう火災は前年6月22日に起きた17世紀以来といわれる大火で、日用品約200万ポンド分が焼失し物価が高騰した。福沢が訪れた4月でも物価高は続いており、故郷中津の知人今泉郡司に宛てた書簡で、値段のあまりの高さに驚いたと述べている。



まだ続いた中津の「福沢諭吉展」

かわ きた のぶ お
河 北 展 生

(福沢研究センター顧問・名誉教授)

前号に、福沢研究センター初代所長の石坂さんが、センター発足当初、三越からの申入れで、東京本店・大阪・横浜の三店で、昭和59年10月から、翌年4月迄の半年間に、延日数32日にも及ぶ、「生誕150年記念福沢諭吉展」を開催することとなり、大変だったが、また楽しい経験だったと記されているのを拝見し、展覧会は三越だけで終わらず、後を承けた私の所長時迄に及んだことを思い出した。

60年12月に、明年3月から50日程福沢先生の郷里、中津市の町おこしを図るため、「'86豊のくにテクノピア」という大博覧会を催すので、義塾に、旧邸隣の福沢記念館（博物館）での「福沢遺品展」などの開催に協力をとの申入れがあった。三越展に続いて中津で大博覧会が計画された原因は、昭和59年秋に、福沢先生の肖像入りの新一万円札が発行され、一挙に福沢先生の人気が高まったのを利用しようとの狙いからである。

塾当局から連絡を受け、センターが展覧会を担当することになったとき、中津三田会の方々へも電話で相談し、義塾としては市の計画の「福沢遺品展」ではなく、三越展のような生涯の活動を示す「福沢諭吉展」としたい旨、また展覧会場の壁面にガラスが張ってないことから、壁面にパネルや写真を飾り、物品はガラスケースに入れて展示するなどの条件を申し出て、その許を得たので、早速現場を知っている塾高教諭の佐志伝さんと、センターの中森東洋さんを相談役として展示計画を作成した。

61年3月21日の開期迄、時間は無かったが三越展のプランを縮小するだけということで作業は順調にすすみ、何か特徴をとということで福沢先生の写真を集め、年代順に張り付けて一階部分の区切りとする大アルバムの妙案が佐志さんから提案され実施された。

相談に時間をとったのは、特別展の展示ではなく、むしろ特別展終了後の記念館の展示を如何様にするかということで、それが旧邸保存会の中津三田会の方々の賛成を得ることができるかであったが、幸い佐藤九十郎氏を始め、何人かの方々が、三越展を見て居られたので、われわれの特別展案を引き継ぐ形で、平素の展示へ戻すことに賛同を得ることができた。

61年3月の飾付けには、河北・佐志・中森の三人と、佐志さんの教え子で学部生になっていた二人の学生の計5名が当たり、展示期間が長いので4月中旬に、一部展示品を交換するため、センター事務の高尾・松井の二

人に出張を依頼した。5月の終了時は、私と、センター事務の中井・中森の両人と、史学科学部生二人の援助を受けて、無事特別展を終了し、平素の展示に直し帰郷することが出来た。

特別展の企画相談中、二品の説明について、面白い話をしたことがあった。一つは、先生命名の因となった『上諭条例』である。先生にとって最も身近に感ずるこの書を、兄が死亡して、急ぎ帰国して、福沢家を相続させられた安政3（1854）年、先生は中津の藩務につくの嫌い、大坂再遊を希望して叔父に叱られ、母上に直談判したところ、母上は即座に先生の希望を許された。その愛情を痛感した先生は、借金を残して出坂しては母に気の毒だということで、返済のため真先にこの書売り払った。それが不思議にも丁度百年後の昭和30（1955）年に大正三年三田会の方々が、中津の旧家に保存されていた本書を買取り、義塾に寄付された。先生の義塾への想いがそうさせたのではないかという話である。

第二の資料は、父上の死亡により中津に帰国されたとき、応急修理をして住まれた家のことを、明治10（1877）年9月23日に思い出して間取り図を描き、その袋に、今は無きこの家から、斜め向いの橋本家を買取って引き移ったのは15歳の頃と認められた資料が、昭和46年に福沢家から義塾に寄託された史料の中から発見された。その時は、昭和41年に設立された旧邸保存会の人達が是非旧邸を国の史跡として指定保存したいと運動中であったが、十三石二人扶持としては広すぎるとの疑問があり、保留されていた時であったので、この資料によって早速90年後の昭和46（1971）年6月22日許可指定された。これもどうやら先生の霊魂が働いて居るようだから、福沢神社のことなども大いに展示しなければいけないのではないかなどと笑ったことがあった。

中津の特別展は無事終了し、義塾所蔵の貴重資料を持ち帰り、残りのパネルや写真と、予て用意した、センターに重複所蔵している先生の著書や研究書を補充品として中津に寄贈し、福沢記念館の展示を、一階は新一万円札や特別展のパネルなどを加えて、先生の生涯の活動と、慶應義塾の現況を展示し、二階は福沢家の家系や、中津出身の門下生の活躍振りを紹介する郷土展とした。それから既に20年、ここ数年は中津に出かけることがなくなり、記念館の現状が気になっているのが、私の現在の心情です。



福沢研究センターにおける知の連関

「講演会／セミナー」

いわ たに じゅう ろう
岩 谷 十 郎

(福沢研究センター副所長・法学部教授)

福沢研究センター（以下、センターと略）は、福沢や慶應義塾の歴史を語り継ぐ大学アーカイブズとしての機能を基本としつつも、その機関名に示されるとおり、発足時から研究機関としての機能を自覚的に備えることを目標の一つに加えた。さらに今年度からは、独自の講座を組織し提供する教育機能をも持つようになった。この「アーカイブズ」・「研究」・「教育」という3つの機能は、もともと別個に追及されるものでもなく、アーカイブ（ズ）⇔研究⇔教育⇔アーカイブ（ズ）という知の資源・方法・実践に関わる一貫した連関の中に置かれるものである。

今回、このコーナーで紹介する講演会／セミナー等の学術活動は、本紙第2号に紹介された紀要『近代日本研究』同様、学術研究機関としての本センターの存在証明にほかならない。

講演会の第一回目は、1984（昭和59）年6月に開催されている。センターの開設の翌年であった。

講演会スタート時のコーディネーターは、当時センター副所長（後、同所長）であった内山秀夫名誉教授であった。講演会開催の初年度には、「連続講演会」と銘打ち、11月に至るまで計7回の講演会が催された（その成果は、『150年目の福沢諭吉』有斐閣選書として出版される）。この「連続講演会」の趣旨は、例えば、84年度は福沢の思想分析、85年度は大正期の政治思想、86年度は昭和戦前期の思想史、といったテーマの下に、歴史・哲学・社会科学の諸分野の第一線で活躍する講演者を招き、精力的に進められていった。2003年度には、『福沢諭吉書簡集』（岩波書店）の「完成記念」講演会が四回にわたって開催された。

いずれにしても、年度毎の講演会を一定のテーマの下に企画しようとの試みは、今日に至るまで踏襲される。ごく最近では、04・05年の両年度にわたって、「北東アジアの伝統と福沢諭吉」（04年度秋）、「明治期経済思想と福沢諭吉」（05年度春）といったテーマが、企画進行中である（参照『センター通信』第1号・第2号）。

講演会の歩みはセンターの20年の歴史とほぼ重なるのに対して、セミナーは、1991（平成3）年5月に始まる。最近まで「金曜セミナー」が「正式名称」であった。

ところで最初のセミナー報告者として白羽の矢があ

たったのは、この私であった。当時のセンター所長、西川俊作名誉教授からの思いも寄らぬこの指名に面食らっていた私に、先生は、「日本近代史研究の枠組みで今関心のあることを話してくればよい」と言われたことを覚えている。私は日本近代史を専攻するものだが、このセミナーとは、当初は福沢研究センターの英文名が示している「福沢記念『近代日本研究センター』」を目指す中で構想されたのではないと思われる。

確かに、選ばれるテーマから見れば、講演会に比しセミナーの方がやや裾野が広いように思われる。だがこの一方で、本センターのホームページに掲げられる過去の記録を通覧すれば明らかなように、セミナーでも福沢や塾史が正面から語られているし、講師の顔ぶれも講演会との判別がにわかにはつきにくい。講演会もセミナーもどちらも学術的な実証に支えられた報告が予定され、企画上両者に本質的な差異があるわけではない。

それでもあえて両者の違いを述べるとすれば、講演会では幅広い層の聴衆を前提にしたいわば包括的なテーマが選ばれることが多いのに対して、セミナーでは、主に大学院生以上の研究従事者の参加を想定した（＝限定という意味ではない）専門的な内容が講師によっていきなり語り出されることになる。また講演会は、原則として三田演説館を会場として催され、聴講のための来館者の便宜を考え、週末を避けた曜日が選ばれる。これに対しセミナーでは、20～30人規模のセミナー室が会場として選ばれ、講師と参加者との間の突っ込んだ議論をプログラムのうちに含めており、学会の研究会の例に倣い、土曜日の午後が選ばれることが多い。セミナーと講演会は、アウトプットの側から見て、専門性の高いものか、あるいは一般性に富んだものなのかの別が与えられるに過ぎない。

現在、センターのホームページには、講演会／セミナーの最新の情報が常にアップされ、聴講・参加の希望者には、学内外を問わず、誰にでも門戸が開かれている。その意味で、講演会／セミナーは、福沢や慶應義塾、そして近代日本についての第一線級の研究を「世間」に提供し公開する場であると同時に、センターが自らをそれにふさわしい研究のネットワークの拠点として学内外に示す場でもあろう。



三田演説館で講演する八木紀一郎氏

福沢諭吉における経済の定則と開化

や ぎ き い ち ろ う
八 木 紀 一 郎

(京都大学経済学研究科・経済学部教授)

1. 福沢諭吉はチェンバーズ版『経済書』によって、社会現象においても「定則 laws」が存在し、経済学は自然科学同様に積極的な探求が必要とされる「科学 science」であることを教えられた。福沢が『西洋事情外編』で訳出して紹介したこの『経済書』は、「定則」の役立て方においても、自然科学と同様に「定則を知て之に従」うことを示唆していた。幕末期の福沢の市場経済や貿易の利益についての言動は、当時の西洋経済学の自由主義的な政策論に一致していると思われる。

2. しかし、明治8年の『文明論之概略』は、アダム・スミスの名前と結び付けて「経済の定則」に言及しながら、他方では経済事情が各国ごとに異なることに留意しなければならないとしている。『概略』の執筆プラン(「文明論プラン」)は、現実のイギリス人とイギリス政府の行動がアダム・スミスに従っていないとみている。経済の「定則」らしきものとしては、財を「蓄積費散」すること、またそれに照応した「智力」「習慣」が必要とされることが「二則の要訣」として述べられているにとどまる。また、明治10-13年の『民間経済録』では、「経済に大切なものは、智慧と儉約と正直と、此三箇条なり」とされる。「定則」によって律される世界が分解して、「定則」が道徳論にまで後退したかのようである。

3. たしかにこれらの「三箇条」「二則」は、客観的世界の「定則」ではなく、経済主体にとっての「定則」である。しかし、『民間経済録』では、リスクに対処する「保険」制度をはじめとして、通貨、政府、銀行、運輸、公共事業などの制度・政策によって合理的経済活動の便宜をはかることが主張されている。また『概略』の「二則の要訣」は、資本蓄積に対応した行動原理である。したがって、幕末期の市場＝流通機構についての表面的認識よりも、合理的経済＝資本主義の理解としては深化したものといつてよい。

4. 『概略』では、社会現象における規則性を探求するために、人々の行動を巨視的に観察することと、近因から少数の遠因に遡ることが提唱されている。それを歴史に応用した場合、「時勢」「即ち当時の人の気風」「即ちその時代の人民に分賦せる智徳の態様」が個人の行動の成否を巨視的に規定する要因として浮かび上がる。これが、彼の「開化」＝「文明論」にほかならない。したがって、経済学の探求法も同様に理解されていたはずである。

5. 「文明論」にしたがえば、政治も経済も人々の「開化」あるいは「智徳」の水準によって規定される。福沢は、このような見方が決定論ではないとして、政府、民間の経済人、学者はそれぞれの活動によって「文明」を進める「職分」があるという。彼が特に強調するのは、経済的な損得勘定を超えた科学的な探求(「好事」)が、人々の知識水準を引き上げる可能性である。彼はさらに、科学的な探求が自然界から「人事」の世界にまで及べば、いつかは個人が社会に束縛されない「人天並立」の状態に達するという楽観論を表明していた。

6. 結論として、福沢は西洋経済学を科学的な探求として受容したのであり、その教義・政策を原理主義的に受け入れたのではなかったというべきである。彼は「文明論」のなかに経済学を含む科学を位置づけ直した。したがって、「時勢」に対応して経済を論じることは、彼にとって、経済学の科学的探究の不可欠な手続きであった。

(本稿は、2005年6月25日に行われた第1回福沢研究センター講演会の概要である。)

明六社・日本学士院と共存同衆・交詢社

—— 福沢諭吉・小幡篤次郎・馬場辰猪 ——

いの　うえ　たく　とし
井　上　琢　智
(関西学院大学経済学部教授)

日本で最初の啓蒙団体とされる明六社は、森有礼のリードで1873（明治6）年、「学者は各其学ぶ所に従ひ、学社を起して以て互に學術を研究し、且講談を為して世人を益す」ことを目的として設立された。森がそのモデルとしたのはスミソニアン研究所（1846-）であり、米国科学促進協会（1848-）や米国学士院であった。その組織は「書籍院会社」と「学。術。文。社中」から成り、『明六雑誌』を刊行した。その特徴は、研究者の集団であり、「書籍院会社」の開放性に比べて、「定員」という「閉ざされた」会員制の「ソサエティー」であった。従って、その後帝国学士院として「官僚機構の一部」となっていく東京学士会院が創立（1879）されると、自然消滅した。

福沢諭吉は、1879年1月の東京学士会院第一回会合で初代会長に選ばれたものの、翌年9月には、その官製的性格を否定し、‘voluntary’を確保しようと、学士会院改革案を提出した。しかし、この改革案は受け入れられず、福沢は小幡篤次郎とともに、脱会した。

これに対して、馬場辰猪や小野梓などによってロンドンで結成された日本学生会に端を発する共存同衆は、男女に参加が認められ、議長を選ぶものの会長を置かず、幹事二名で運用する民主的で「開かれた」組織であった。従って、「不偏不党」「種々の人種の共存」が可能で、各衆員は、「権理を求め、義務を責め」、「ある某に専制されると云ふの感覚なきが故に、又安心して是を遵守」できる組織であり、「我が自由思想を以て相許して定置したる」組織で、「平等の権理を自主する者の結社」であった。さらに重要なことに、馬場は、『共存雑誌』を刊行し、共存会館を建設し、この結社を日本各地で展開することで、日本を近代市民社会へと改革しようとの想いを抱いていた。まさに「我日本七十余州三千五百万ノ人民ヲ団結シ以テ一大社会ヲ組成」するためであった。800名が参加した第一回年会成功は、馬場の想いが実現する前触れであった。だが、共存同衆は1880年4月の集会条例によって壊滅的打撃を受けた。

この頃、慶應義塾の維持は困難になっていた。1877年10月から1878年6月まで、福沢は資金調達に奔走していた。その手段の一つが、その後、交詢社となる結社の提案であった。だが、社則立案委員小幡篤次郎、馬場辰猪らの間で、この結社の性格付けについて意見の相違があったものと思われる。「慶應義塾の本



講演中の井上琢智氏

色は天下の後進生を学問上に教育するものなれども、其到底の目的は社会の風俗を改良して人生に大切な居家処世の道を安からしめんとするに在り」。この「慶應義塾社中集会の趣意書」の前段では、福沢が当初意図していた「社中の結社」すなわち同窓会としての役割が指摘されているものの、後段では馬場が意図していた「社会改良」を目指すと言っている。この後段の主旨は「社則大意」（「先ず人間最第一繁（緊）要たる社会結合の旨を達するが為に、世に先ちて一社を結び、其社漸く体を成すに従て社中又社を結び漸次に専門に従事せん」）にも窺える。加えて、会長は置かず常議員での運営、「農部会」「経済部会」など部会の設置、支社設置による全国展開など、基本的には共存同衆がモデルとした社会科学振興協会と同じ組織であった（もっとも、交詢社では女性の参加が今なお認められていないが）。

しかし、交詢社が自由民権運動に巻き込まれるようになると福沢は、「本社は初より政談の社に非ず。其政党の中には本社の社員にして同盟したる者も多からんと雖も、政党は政党なり、交詢社は交詢社なり」として、後段の社会改良の役割を切り捨てる。改革を目指し自由党に参加したものの、運動に破れ、「結社」を通じた近代市民社会の形成を断念した馬場は、「個人」行動を重視し、唯一「国会ヲ設立シテ参政ノ権ヲ全国民ニ与フルニアルノミ」と参政権確立に期待した。この二人の中にあつて小幡篤次郎は如何なる具体的な役割を果たしたであろうか。この交詢社に関わる福沢・小幡・馬場というデルタ研究は日本近代化論にとって大きなテーマである。

（本稿は、2005年7月6日に行われた第2回福沢研究センター講演会の概要である。）

明治経済の隠されたドラマ

たけ もり しゅん へい
竹 森 俊 平

(慶應義塾大学経済学部教授)

明治期において、福沢と松方正義は財政金融政策についての二つの対極的な思想を体現していた。西南戦争後の不換紙幣の処理方法をめぐっての問題と、金本位制への移行問題という二つの出来事に関連して、二人は二度対決することになる。

まず福沢の思想は、積極的な財政金融政策ということで特徴付けられる。アダム・スミスやスタンリー・ジェヴォンズなどイギリスの代表的な経済学者が論じていた、貨幣は「交換の媒体」にすぎないという思想を、福沢は独特の用語で明快に表現していたが、[交換の媒体]なら貴金属でなくても紙で構わないという「不換紙幣」を標準的な貨幣にするという斬新な提案を彼は行った。また、彼の文章の中には緊縮財政政策が失業の増加につながるというケインズ的な認識も明確に認められる。

西南戦争後の高インフレを前にして、福沢も結局は「兌換紙幣」を通貨の基本とする必要を認めるが、そのための方策として松方のように緊縮財政政策を採るのではなくて、外債を募集することを福沢は提案している。その際、為替変動による実質債務増加のリスクがないかどうかという点についても、福沢の分析は今日的な視点で見ても鋭いものである。

福沢と対照的に、慎重派の立場をとったのが松方だが、愚直に見えて、松方の経済運営にも、今日の経済学の目から見ても賞賛に値するところがある。それは松方がデフレ政策を実施するに当たり、市場との対話を重視して、今後、起こる経済事態についての理論的な分析を、正直に伝えたことである。たとえば、[今年の景気は最低だが、来年はかならず更に悪化する]といった言葉が、典型的な松方流の弁である。しかもデフレの発生についても、それは「構造的要因」によるものではなく、すべて自分が実施している財政金融政策によるものだと責任を認める。このように責任を認めるのは、デフレがどのような状況で、つまり紙幣の整理がどの程度進んだ段階で終わるのかをはっきりさせるため、実際、紙幣整理

がある程度進んだ段階で、経済主体はまもなく政策の転換があることを分かるから、投資の回復はデフレが続いている状態で、すでに見られている。ようするに、松方は今日の中央銀行総裁が行っているような、経済見通しの発表を自分が大蔵大臣のときに率先して行っていた。

福沢と松方の方針の違いは、前者が国会の設立を早めに行うべきだと主張し、後者が遅らすべきだと主張したという点と、密接な関わりを持つのではないか。要するに、福沢は民主主義を安定的に維持するためには、景気の安定が重要だと考えていたのである。それに対して、民主主義をプライオリティーと考えていなかった松方には「人気取り的」な政策の必要性はなく、市場に真実を告げることができた。今日で言えば、財政政策は民主主義的に運営されるが、金融政策は中央銀行が独裁的に行う分業が、二人の思想家の対立として現れていたことになる。

(本稿は、2005年6月4日に行われた第1回福沢研究センターセミナーの概要である。)

福沢諭吉の経済政策思想

— 田口卯吉との比較を通じて —

なか むら むね よし
中 村 宗 悦

(大東文化大学経済学部教授)

松方正義によって断行された紙幣整理とその後の銀兌換による日銀券の発行は、日本を「実質的銀本位制」の通貨体制へと導いた。しかし、折からの国際的銀価の下落は、日本が選択すべき本位制をめぐっての経済政策論争を活発化させていった。1893年から1年半以上にわたる貨幣制度調査会での議論は、明治期の日本の経済政策論争史上、その精度・レベルともに白眉をなすと言って良いだろう。

福沢諭吉はこの調査会に直接参加はしなかったが、『時事新報』社説で「銀価下落」が後進国日本の産業発展にとって有利であるとの立場から、現行制度維持の論陣を張った。福沢の立場に近い調査会メンバーも調査会において同様の議論を展開した。一方、銀の廃貨＝金本位制の移行に反対した調査会メンバーに『東京経済雑誌』

主筆の田口卯吉がいた。田口は金本位制がもつデフレ的効果を憂慮しつつ、複本位制による通貨価値の安定こそが採るべき本位制のあり方であると終始一貫して主張した。いずれにせよ、調査会での議論は金本位制即時移行を支持する大勢ではなかった。しかし、結果的にはこうした議論の成果は政策に反映されることなく、1897年の日本の金本位制移行をもって幕を下ろした。その裏には、調査会の「現行制度の変更の必要有り」という結論を、金本位制支持と読み替えてまで金本位制移行に固執した松方の断固たる意思があった。

金本位制移行策が必ずしも経済学的な根拠を伴うものではなかったことは、たとえば中村隆英氏が『明治大正期の経済』（1985年、東京大学出版会）において、つとに論じているところである。この点はまた『明治財政史』以来の松方紙幣整理による通貨制度安定が経済発展をもたらしたとする「公式見解」を批判し、銀価下落下における日本の経済成長を評価する視点を強調するものであった。明治中期の福沢の議論も、日本の当時の経済状況を肯定したものであった。

しかし、銀本位制支持の論者は金本位制反対の立場で共同戦線を張ることができなかった。同時期にアメリカで銀本位制論が敗れ去ったように、日本でも「魔女の策略」（竹森俊平「世界デフレは三度来る」）が成功したのであろうか。本報告では、この本位制論争時の福沢と田口の議論を中心に検討を加え、それらが金本位制反対論として一致できなかった理由について、以下の二つを挙げた。

第一には、貨幣の機能に対する両者の考え方の相違に起因する理由である。福沢がもっぱら貨幣を交換の手段としてみなし、本位貨幣の価値の安定という側面をほとんど無視していたのに対し、田口はあくまでも貨幣価値の安定の重要性を説いた。福沢が銀価下落を「一種の保護税」として見なしていたのに対し、田口は「貨幣価値の下落さえあれば輸出が伸びる、ただそれだけのことであれば、こんな簡単な話はない」と批判した。また田口が「万国複本位」による通貨価値の安定を実現の可能性が低いものとして退けられなかったのは、金本位制のもつデフレ効果によってやがて欧州各国も複本位制に還らざるをえないと見越して（見誤って）いたからであった。

第二には、政策当局者の金本位制への確固たる意思を、両者ともまったく見抜けていなかったことが挙げら

◇秋の講演会・セミナー

テーマ「明治法制と福沢諭吉」

《講演会》「福沢諭吉の地方自治論」

石川 一三夫 氏（中京大学法学部教授）

10月25日（火）午後3時～4時30分

会場・三田演説館

《講演会》「福沢におけるトクヴィル問題」

— 西南戦争と『アメリカのデモクラシー』 —

安西 敏三 氏（甲南大学法学部教授）

12月2日（金）午後3時～4時30分

会場・三田演説館

《セミナー》「官学アカデミズムを作った福沢門下生」

— 初代帝国大学総長渡辺洪基の生涯と思想 —

瀧井 一博 氏（兵庫県立大学経営学部助教授）

12月10日（土）午後3時～

会場・三田 塾監局第3会議室

テーマ「北東アジアの伝統と福沢諭吉」

《講演会》「韓国開化派の女性観」

李培鎔 氏（梨花女子大学平生教育院長・史学科教授）

11月26日（土）午後2時～

会場・三田演説館

*講演会は広く一般の方々を対象とし、セミナーは大学院生レベル以上の方々による研究会の形をとっています。

れよう。松方は最初から金本位制採用を究極の目標としてプライオリティを置いていた。しかし、松方自身はそれを民間要路に明確に「説明」してはいなかった。福沢にしる田口にしる、明治30年の貨幣法案上程に際して虚を突かれた感が否めない。これは銀兌換制実施に際しても同様であった。ただし、貨幣法案上程の際には「新平価」による新たな本位貨幣を定めたために、銀本位制維持派の反対を押さえ込むことに成功したのである。

（本稿は、2005年7月16日に行われた第2回福沢研究センターセミナーの概要である。）

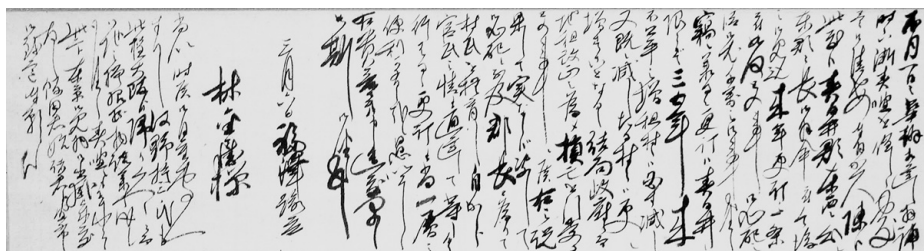
主な新収資料

平成17年1月から8月末までに収蔵された資料のうち、主なものを紹介する。

福沢諭吉書簡

■ 林金兵衛宛福沢諭吉書簡 明治13（1880）年3月6日付（書幅仕立）1幅

林金兵衛は文政8（1825）年生まれ。愛知県春日井郡上条村の豪農。幕末には草莽の志士として活躍し、廃藩置県後は愛知県第三大区長を務めた。地租改正に際して、春日井郡内東部西部間の不公平感から生じた争い、いわゆる春日井事件の際、43カ村の代表として明治11年上京、福沢の助力を得て地租改正事務局に出訴した。目的は達せられなかったが、事件後東春日井郡長に就任。書簡は東春日井郡長として村民の撫育をすすめるとともに、地価更訂の今後の見通しを述べたもの。



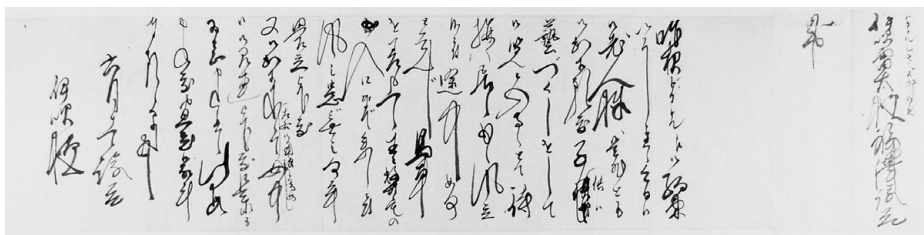
■ 伊吹（藤山）雷太宛福沢諭吉書簡

明治20（1887）年6月11日・7月20日・7月28日・8月5日・8月26日・8月27日・8月31日・10月5日・31年8月25日・年末詳7月2日付（卷子仕立）1巻

藤山雷太は文久3（1863）年佐賀県有田郡大里生まれ。明治17年9月に慶應義塾に入学し、同年伊吹家に入籍した。20年4月卒業後、福沢の紹介でアメリカ人医師D・B・シモンズに師事。24年伊吹家から離籍し、藤山姓に復した。25年三井銀行入行、担当係長となり、のち担当流れとなった工場を芝浦製作所と改称して主任・支配人となった。

20年の書簡は、福沢が三田山上にシモンズのために用意する邸宅（のち万来舎として使用される）建設に関するやりとりが中心。31年のものは慶應義塾卒業生曾木晋の入社試用依頼。年末詳のものは、会合の日程変更を伝えている。

今までは福沢家に残された写本しかわからず、『福沢諭吉書簡集』でも校訂作業を行うことができなかった。また今回購入した卷子は3巻で、うち1巻は福沢の書簡であり、他2巻は藤山雷太の依頼を受けて、福沢一太郎がシモンズの思い出を書き留めたもの（45年3月11日付）や鎌田栄吉遺墨などが貼り込まれている。



その他の資料

■ 福沢桃介書簡（卷子仕立）9通

昭和4（1929）年から6（1931）年に大同電力会社に宛てたものが主である。

■ 小幡篤次郎遺墨（未表装） 櫻井峯夫氏寄贈 3点

本年は小幡篤次郎が明治38（1905）年4月16日に歿して100年になる。曾孫（篤次郎3女^{せい}静孫）にあたられる櫻井峯夫氏（塾員）からは、前号で紹介した5通の篤次郎差出書簡をはじめ関係資料の寄贈を受けている。今回は漢詩を記した遺墨3点（号箕田、関防印落款あり）を寄贈していただいた。

■ 清岡家資料 清岡チャールズ氏寄贈

平成17年3月、福沢諭吉の孫（3女俊の長男）にあたる故清岡暎一名誉教授の遺品が慶應義塾に寄贈された。清岡家からは既に暎一氏により、書幅・書簡類をはじめ福沢諭吉に関する主な遺品が搬入されており（当初塾史編纂所、のち福沢研究センターが保管）、今回福沢に関する資料はあまり含まれていない。それでも俊に与えた人形には福沢諭吉自筆の箱書きがあり、また残念ながら中身はないが、書籍箱の蓋にも俊にあたえた自筆の書付があった。福沢自筆書幅も3点あり、他に福沢家で使用されていた丸テーブルや家紋をかたどった金具のついた筆筒など、貴重な品々が含まれていた。写真資料は明治期と思われる塾生集合写真の他に、福沢諭吉の肖像写真が多数あった。おそらく配布用に作製されたものと思われる。福沢関係の資料の保存状態は、物品については良好とはいえないが大きな欠損はなく、また文書資料の虫食いなどもさほどひどくはない。

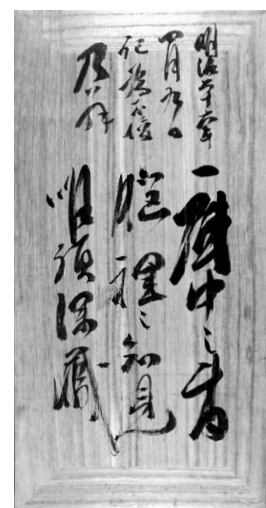
大部分を占める清岡暎一氏の遺品は、大量の書籍・書簡・原稿・書類・写真で、保存状態が非常に悪い。虫害・鼠害が多く、また埃とカビによる劣化がひどい。水に1度つかってしまったものも多く、全く読むことや見ることが不可能になってしまっているものもあった。書簡・書類・写真などは、ごく一部を除きファイリングがなされていなかったため、あらゆる差出・日付・形式のものが混在している。清岡氏は慶應義塾の外事部（のち国際センター）に勤務され、またハワイとの交換留学生プログラムであるプナホウプログラムの実施にも尽力されたので、その関係資料は多く含まれていると思われる。現在埃などを除去し、福沢諭吉関係・慶應義塾関係など大まかな分類を行って整理している。また、書籍は架蔵図書との重複調査を行っている。

羽織（福沢家紋付 福沢諭吉夫人錦着用のもの）	1 着
着物（福沢家紋付）	3 着
人形（男児女児）および人形箱（福沢諭吉の箱書のあるものを含む）	2 体 2 箱
筆筒（家紋金具付）	1 棹
丸テーブル	1 点
福沢諭吉遺墨書幅（「中外風光…」「一面真相…」「戯来戯去」）	3 幅
福沢諭吉自筆箱書	1 点
清岡邦之助および俊写真	12 枚
福沢俊写真（福沢諭吉自筆裏書付）	1 枚
福沢錦自筆中元袋	1 点
修身要領書幅（石版刷）	2 幅
慶應義塾塾生集合写真（力士・福沢捨次郎・鎌田栄吉ほかと共に）	1 枚
慶應義塾塾生集合写真（32番教室前にて）	1 枚
他慶應義塾外事部関係史料	

三田国際文化交流会関係史料

杉本鉞子・千代野関係史料

など 計段ボール約60箱分



❖ 主な動き

■ 専任所員の就任

本センターはこれまで、規程上、専任研究員を置けず、兼担所員と嘱託（教員系）によって研究活動を維持してきた。しかし、兼担所員は学部・学校等の主務部署での仕事が多く、なかなか本センターのために時間をさけず、また嘱託は、身分上きわめて不安定な立場だった。このような状況を改善するために、昨年、規程改定が行われ、専任研究員を置けるようになったことは、既にお知らせした。その上で、本センター運営委員会は専任所員採用に向けて努力を続けてきたが、本年4月1日付けをもって、西沢直子君を助教授（専任所員）として採用することができた。

なお採用は、「福沢研究センター専任所員新規採用内規」に基づき、運営委員会が候補者を決定し大学評議会へ推薦、同評議会の議を経て、塾長により任命されるという手続きを経て行われた。

■ 福沢研究センター設置講座始まる

本年度春学期より、福沢研究センター設置講座が始まった。春学期には、講義として岩谷十郎君・坂井達朗君・米山光儀君・小室正紀君の担当で「近代日本研究Ⅰ—『学問のすゝめ』とその時代—」が、また演習としては寺崎修君の担当で「近代日本研究演習Ⅰ—『通俗民権論』と『通俗国権論』を読む—」が開講され、前者は58名、後者は8名の履修者があった。秋学期には、西沢直子君担当「近代日本研究Ⅱ—「独立自尊」の原像—」と松崎欣一君担当「近代日本研究演習Ⅱ—福沢書簡の研究—」が開講される。

■ 講演会・セミナー「明治期経済思想と福沢諭吉」

本年度春学期には、本誌に要約を掲載した（4～7頁）ように、「明治期経済思想と福沢諭吉」という統一テーマで、講演会2回とセミナー2回が行われた。

■ 『慶應義塾150年史資料集』

現在、主に『慶應義塾史事典』（『150年史資料集』第Ⅰ期別巻、2008年刊行予定）、『福沢諭吉事典』（福沢諭吉生誕175年記念、2009年刊行予定）、『塾員・塾生情報集成』（『150年史資料集』第Ⅰ期第1巻2009年刊行予定）、『慶應義塾史基本資料解題』（第Ⅰ期第3巻2011年刊行予定）の編纂作業を並行して進めている。最初の刊行となる『慶應義塾史事典』については、項目選定を今秋中に終わり各項目の執筆に取りかかる予定。

また、『塾員・塾生情報集成』は、明治期に慶應義塾で学んだ塾員の名簿（『塾員姓名録』）と『慶應義塾入社帳』を合体した資料集であり、これにより、彼等の入学から卒業後の職業遍歴までを個人別に追跡できるようになる。

■ 図書検索システムの試験稼働

この春より、福沢研究センター所蔵図書の電子検索システムの構築を開始したが、取りあえず、2003年4月以降の収書分について検索システムが試験的に稼働し始めた。順次、遡及入力をし、簡略版ながら早期に本センター全蔵書の電子検索が出来るようにすることを目指している。

■ 写真データベース

本センター所蔵写真（アルバム版）1万件余りのデジタル化は、3月末までに素入力が終了した。しかし、原キャプションの記述の誤りや、メタデータの乱れがあるため、あらたに第2期事業として、これらの問題部分の洗い出しと整理を目指している。同時にDMC（デジタルメディア・コンテンツ研究統合機構）に協力して試験的に提供した約1000件の写真データに関しては、著作権保護や個人情報保護の観点から、インターネットで公開可能なデータへの差し替えを進めている。

■ 石河幹明家資料拝借

『時事新報』主筆であった石河幹明（1859-1943）に関する資料を、御子孫の石河家の御好意により、調査のため当座お預かりをした。幹明は、『福沢諭吉伝』の著者、大正版『福沢全集』、『続福沢全集』の編者として著名。近年、幹明の『全集』編纂方法について、議論の提起もあるが、新聞人としては、大逆事件の際に連続社説で当局の姿勢を批判したり、乃木大将の殉死を批判した社説を執筆しており、福沢門下として、リベラリストの姿勢を示した。センターでは、お預かりした資料の調査をすすめ、早急にその概要を報告する予定。

■ 『時事新報』原稿の重点的収集を始める

福沢諭吉の言論活動を研究する上で、社説など『時事新報』の自筆原稿は極めて資料価値が高い。そこで、福沢研究センターでは、今後、積極的に『時事新報』の自筆原稿を収集することにした。何かご存じの情報があれば、是非、センターまでお寄せ下さい。

福沢研究センターは残念ながら、一般に公開できる常設の展示室を持っていない。そこで事務室前の空間（三田キャンパス旧図書館正面入口ホール）を利用してケース4台を設置し、簡単な展示を行っている。しかし、完全な開放スペースであるため、史料劣化および盗難防止の観点から、レプリカによる展示が中心である。多数所蔵している版木や版本のみ、原史料をそのまま展示している。

展示のテーマおよび各ケースの主な展示品は、以下の通りである。

【福沢諭吉の生涯】 《ケース1》

適塾および適塾入門帳写真

万延元（1860）年渡米の際少女と撮影した写真（複製）

文久2（1862）年遣欧使節に同行した際セントペテルスブルグで撮影した写真（複製）

遣欧使節に同行した際に使用した手帳（複製）

慶応3（1867）年ニューヨークで購入した乳母車写真

明治8（1875）年に開館した三田演説館写真

三田演説館内に掲げられている福沢諭吉肖像画写真

明治29（1896）年大学部文学科卒業生および福沢諭吉・小幡篤次郎・森鷗外ら教員集合写真（複製）

《ケース2》

『福翁自伝』（明治32年出版）草稿（複製）

明治33（1900）年撮影福沢諭吉と妻錦写真（複製）

【福沢諭吉の出版活動】 《ケース2》

『西洋事情 二編』版木

『西洋事情 二編』版本

【各国語に翻訳された福沢著作】 《ケース3》

『学問のすゝめ』韓国語・インドネシア語・中国語・タイ語・モンゴル語・英語訳

『文明論之概略』韓国語・中国語・英語訳

【慶應義塾の歴史】 《ケース4》

築地鉄砲洲絵図（慶應義塾発祥の地）写真

明治期に教室として使用された旧島原藩邸写真（複製）

明治45（1912）年開館当時の創立五十年記念図書館写真（複製）

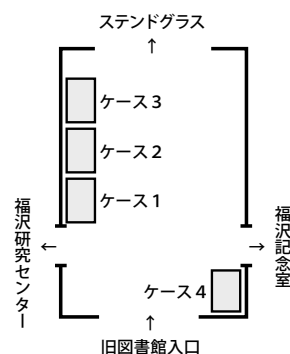
昭和9（1934）年開設されたばかりの日吉キャンパス第一校舎写真（複製）

昭和33（1958）年慶應義塾創立百年記念式典写真（複製）

現存する最も古い福沢諭吉書簡（安政5年11月22日付宛先不明、個人蔵）写真



また福沢研究センター向かい側には、福沢記念室と呼ばれる展示室があり、慶応3（1867）年幕府の軍艦受取委員の一員として渡米した際、ニューヨークで購入してきた乳母車をはじめ、健康維持のための米搗き運動に使用した臼や、メガネ・硯・煙草盆などの遺品、また慶應義塾草創期の資料である『芝新銭座慶應義塾之記』（慶應義塾命名の由来が記されている）『慶應義塾社中之約束』（学則類）『慶應義塾勤惰表』（成績表）などを展示している。しかし普段は閉室されていて見学することができない。外国からの来賓や授業としての見学などの要請があった場合に、開室している。また年に1度、オープンキャンパスの際には一般に向け公開している。



福沢記念室内部

見学時間 月～金曜日 8:30～17:00
土曜日 8:30～15:00

*但し、旧図書館正面入口が開いていれば上記以外の時間帯でも見学は可能です。

*日曜・祝日および慶應義塾で定められた休日は、見学することが出来ません。

*福沢記念室の見学は三田オープンキャンパス時のみです。慶應義塾のホームページで日程をご確認ください。

■ 諸会議

- * 第1回センター会議(6月29日:南館4階会議室)
 - 1. 人事について
 - 2. 平成17年度予算について
 - 3. 平成17年度事業への取組み状況について
 - 4. 「創立150年記念事業の位置付け図(案)」について
 - 5. 新収資料について
- * 第1回運営委員会(7月7日:図書館旧館小会議室)
 - 1. 報告事項(第1回センター会議を参照)
 - 2. 協議事項
『慶應義塾150年史資料集』編纂補助員の呼称の変更(編纂補助員→調査員)
 - 3. その他懇談事項ほか
- * 「慶應義塾150年史資料集」編纂委員会
 - 第3回(3月14日:図書館旧館福沢記念室)
 - 第4回(4月18日:図書館旧館小会議室)
 - 第5回(5月30日:図書館旧館小会議室)
 - 第6回(7月7日:図書館旧館小会議室)
 - 第7回(8月2日:図書館旧館福沢記念室)
- * ワークショップ
 - 第3回(5月24日:東館小会議室)
「明治18年井上角五郎官吏侮辱事件の一考察」
報告者 都倉武之

■ 人事異動

- <福沢研究センター助教授>
 - 新任 西沢直子 4月1日付
- <顧問>
 - 新任 松崎欣一 4月1日付
- <非常勤嘱託>
 - 新任 柄越祥子 4月1日付
 - 吉岡 拓 4月1日付
- <研究嘱託>
 - 新任 金 眞瑠 4月1日付
 - 巫 碧秀 4月1日付
- <事務局>
 - 新任 市古健次(事務長) 4月1日付

■ 展示会開催

- * 法科大学院校舎新築披露「万来舎」関連展示
(3月28日-29日:南館)
- * オープンキャンパス向け展示
(7月29日:図書館旧館福沢記念室)

■ 資料貸出・協力

- * 早稲田大学大学史資料センター主催
「最後の早慶戦—1943年晩秋」展
- * 国立印刷局主催「新札発行記念」展
- * NHK スペシャル番組「明治」
- * 東京電力電気の史料館第5回企画展
「工業立国日本の誕生—もうひとつの明治維新」
- * 新宿区立歴史博物館主催
「暦の世界」展

■ 来往

- * 明治大学史資料センター村松玄太氏、橋川文書の整理
閲覧のため来訪(5月23日-9月8日まで7度)
- * 甲南大学文学部高阪薫教授他一行(3月23日)
- * モンゴル国立大学社会科学学院宗教学科
Samdangiih Tsedendamba 教授他一行(3月30日)
- * 関西大学出版部熊博毅氏(3月30日)
- * 法政大学キャリアデザイン学部長笹川孝一教授他一行
(5月2日)

■ 出張・見学

- * 西沢直子助教授 第9回学際的国際女性会議出席
(6月21日-26日:ソウル・梨花女子大学)
- * 西沢直子助教授 中津の福沢記念館、小幡記念図書館
に調査のため出張(8月3日-5日)

■ 講師派遣

- * 西沢直子助教授 福沢先生ウェーランド経済書講述記念
講演会「小幡篤次郎没後100年」(5月16日:演説館)
- * 山内慶太所員 港区立郷土資料館講座
「遣欧使節の福沢諭吉とその後」(6月28日)

慶應義塾福沢研究センター通信 第3号

News letter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日 2005年9月30日 (年2回刊)
編集 慶應義塾福沢研究センター
発行
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
電話 03-5427-1603
http://www.fmc.keio.ac.jp/
印刷 (有)梅沢印刷所